令和２年度発達障害児コーディネーター設置事業の報告書

実施主体：佐賀県
委託先法人：非営利活動法人それいゆ

１　事業名

令和２年度発達障害児コーディネーター設置事業

２　事業要旨

困難な課題を抱える発達障害を持つ児童・生徒が、家庭での安定した生活や学校への復帰、地域社会での生活をしていくためには、関係機関がそれぞれの場所で支援をしているだけでは限界がある。このため、医療機関や教育機関、福祉関係機関、その他の地域資源が連携をして対象児を支援する必要があるが、連携を図るためには対象児に関する情報の収集と共通理解が必要である。

そこで、当該事業では、困難な課題を抱える発達障害児に対する適切なアセスメントを実施するとともに、その結果や支援の方向性を関係機関で共有することで共通理解を図り、医療、教育、福祉、その他関係機関がそれぞれの役割を認識したうえで同じ方向性を持って支援できるようコーディネートをしてきた。コーディネートに当たっては在籍校、市町教育委員会、巡回相談員などによる支援会議を定期的に行い、情報共有を行った。

令和２年度は６名の発達障害児を支援し、２名は進学の時期と重なった為、フリースクール利用期間の終了と同時期に特別支援学校中学部や通信制の高校への進学をした。他１名は在籍校に戻ることができず放課後等デイサービスの利用ができないか検討中である。残りの２名については、現在も支援を継続している。

対象者が上手く周囲の環境に適応するには、自身の障害特性を認知するが重要であり、自己認知するためには十分な支援期間の確保が必要である。また、保護者、学校、支援者が連携して、対象者が相談できる体制を整備していくことも重要である。

支援については早い段階ですることが重要であるが、早い段階で支援を受けることができなかった対象者に対しても、新しい環境で上手く適応できる環境整備をしていけるような体制づくりをしていくことが今後の課題である。

３　事業目的

発達障害により家庭や学校で不適応を起こし、不登校や２次障害、家庭内暴力等の困難な問題を抱えている児童・生徒に対し、適切なアセスメントを実施

し、同じ方向性を持って支援することで、本人の家庭生活の安定、学校への復帰、及び地域生活の支援を図る。

４　事業の実施内容

（１）事業概要

佐賀県では、発達障害児適応訓練事業（フリースクールＳＡＧＡ）を実施している。この事業では、自閉症スペクトラム、学習障害、注意欠陥多動性障害等のため、学校への不適応、不登校等の就学困難児童について、市町教育委員会や在籍校との連携のもと一時的に在籍校を離れた形での支援を行い、在籍校への復帰を目指している。

今回のモデル事業となっている発達障害児コーディネーター設置事業では、上記の発達障害児適応訓練の訓練終了者に対して、市町教育委員会や在籍校との連携のもと、在籍校への復帰後のフォローアップ支援を行っている。

また、進学後の適応に不安がある児童・生徒に対し、必要に応じて、関係機関と連携のもと移行支援会議を開催し、本人や家族へ支援を行った。

令和元年度に支援対象となった発達障害児は４名であり、以下のとおりである。

対象者	対象者の年齢・性別	所属学校	在籍期間
A	14 歳・男児	城西中学校	18 ヶ月
B	15 歳・女児	鳥栖中学校（卒業）	13 カ月
C	13 歳・男児	御船が丘小学校（卒業）	12 ヶ月（小学校の卒業まで） その後６カ月間までフォローアップ期間
D	13 歳・男児	桜岡小学校	6 ヶ月
E	9 歳・男児	古枝小学校	8 カ月
F	9 歳・男児	北茂安小学校	3 か月

（２）各対象者への対応

①**対象者Ａ（中２）**

令和元年７月22日に城西中学校で支援会議（利用審査会）を実施。

大和特別支援学校　巡回相談員１名

佐賀市教育委員会　１名

佐賀市立城西中学校　２名

佐賀県発達障害者支援センター　結　１名

佐賀県障害福祉課　２名

特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）２名

【利用開始までの経緯】

診断時期は３歳で、車の音やバイクの音が苦手で耳を抑えていた事もあった。３歳半検診で保健センターのすくすく相談会を紹介され、親子療育教室のわくわくキッズの利用後、肥前精神医療センターを受診し注意欠如多動性障害、自閉スペクトラム症と診断される。

フリースクール利用開始前の診断書には、「注意欠如多動性の不注意、多動衝動、すべての症状を有している。また、他者の思いや感情を把握することが難しく、自らの思いを言語的に表現することも苦手である。ゲームなど興味の幅が狭く、こだわりや感覚過敏が強い。集団行動が苦手で、現在不登校状態が継続している。登校時には、少人数または個別での対応が適切と思われる」と記載されている。

小学１年（情緒クラス在籍）の３学期に両親の離婚により、学校を転校することになったが転校先の学校には情緒クラスが無かったため３月までは特別支援クラス（知的）で過ごした。小学２年時からは情緒クラスに在籍し、国語と算数以外の教科は交流級で過ごしていたが、対人関係の困難さから交流級で過ごすことができなくなり、その後登校できなくなった。小学５年時に登校するが、その頃は騒がしい場所や集団が苦手だったため、支援クラスのメンバーとの関わりに不安を感じ登校できなくなった。

小学校を卒業するころ本人は中学校に行って勉強したいという気持ちでいたが姉と兄が中学校で不登校になっていたので、母としては本人が中学校に行ってもうまくいくとは思えなかったため、中学校への登校ではなく、フリースクールの利用を勧めた。家では、祖父母も同居の為、１日中ゲーム（DS, YouTube、Switch）などをして過ごしていたが、本人は学校に登校していないが家に居ることもダメなことだと思っていた。

利用審査会で対象者Ａについて出た意見は以下の通りである。

・フリースクールは、高校にむけた準備として利用する。
・今のタイミングで、フリースクール利用をすることが本人にとってプラスになる。
・今の状態で学校に復帰したとしても、現時点で本人に必要な支援を学校が提供ことは難しい。

以上の意見、その他複数の意見を踏まえて、フリースクール SAGA を利用することが決定した。令和２年１月に利用経過半年の支援会議を予定していたが、コロナウイルス感染症予防対策の為、学校と相談し、会議を中止することとなった。

令和２年 8 月 24 日に城西中学校で支援会議（利用期間終了）を実施。
出席者は以下のとおり。
保護者１名
大和特別支援学校　巡回相談員１名
佐賀市立城西中学校　２名
佐賀県発達障害者支援センター　結　２名
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）３名

【審査会の内容】
保護者
「フリースクール SAGA を利用してから、フリースクールに行かないという選択肢がないくらい、どんな日もフリースクールに行こうとしている。以前は、毎日家から出る事もなく『暇だ』と言っていたがフリースクールの利用が決定したときから、朝早く起きたり、お風呂に入ったりと生活が変わった。登下校には、自転車、バスを使って登校し、それに伴って、身支度やお金の管理も学ぶことができ、成長を感じている。夏の暑さ、冬の寒さにも負けず、休むことなく元気に登校を続けることができ、先生方に感謝している。」

フリースクール SAGA の経過報告
本人の自閉スペクトラム症の特性とともに、フリースクールで学んだこと、社会生活を送っていくうえでの課題を説明した。

特　性（苦手なこと）
・１日の流れに見通しをもって過ごすこと
・状況に合わせて優先順位を立てること
・指示が具体的でないと行動に移すこと

・失敗することに対しての抵抗が強い
・思ったことをその場で口にしてしまいやすく相手に失礼になるかどうかを瞬時に判断すること
・ルールが明確でないと自分に都合よく解釈してしまう
・自分の要望があっても「どちらでもいい」などと言ってしまう等

【支援内容】
フリースクールSAGAでは、本人のもつ困難さに配慮しながら自立的に過ごすことができるように学習の機会を設定し、視覚的な手立てを使って支援すると自立的に過ごすことができ、活動の変更や時間の変更などがあっても、柔軟に対応することができた。人と関わることを好み、冗談を言いながらスタッフと遊んだり、外で体を動かしたりすることに意欲的に取り組み、長期休暇中も決められた日には登校できていた。スタッフとの信頼関係ができた頃から、自己認知学習を始め、人には、それぞれ違うところがあり、たくさんの違いの１つが「自閉スペクトラム症」があることを理解しやすい例をあげながら具体的に学んだ。本人が納得のできる内容以外は、あまり受け入れられないような様子だったが自覚することの難しさとともに自分のプライドを守りたいようにも見えた。思ったことをそのまま口に出してしまう事については、人の言動が相手にどのような影響を与えるのかについて視覚的な手立てを使いながら学習し、「相手を思いやる言動、振る舞いを意識しよう」とポジティブな表現で学習を進めた。
フリースクールで日々過ごす中で、言葉遣いを意識して過ごす課題に取り組む為に、礼儀正しい言葉を使って過ごせたらスタッフからご褒美となるチケットを渡し、チケットが貯まったらご褒美タイム（ラウンドワンに行く）を設定したところ、すぐに効果が表れた。本人が意欲的に自分の言動を意識したことにより、関わっている相手に対して不適切な言動がほとんど見られなくなり、最終的には、そのチケットの制度がなくても、相手に対して穏やかな対応が取れるように変化した。

〇母の意見
フリースクールに通う習慣がついたので、フリースクールの利用期間が終了後は、学校への登校を希望。中学校３年生で、学校をチャレンジし本人の様子をみることで、高校選択を考える際に参考になる。本人の心と体の調子を見ながら、中学校に通わせたいが、中学校に通うことでダメージを受けてまた引きこもってしまうということはないようにしたい。

〇学校からの意見

学校は本人にとってはかなりストレスフルな状況であるので、受け入れをする職員としても不安に感じる。適応指導教室などの学校以外の選択肢もあるのではないか。

〇他の参加者からの意見
・いきなり普通に登校することは難しいかもしれないけれど、その為にフォローアップ期間というものがある。
・無理かもしれないけれど、チャレンジは必要。
・義務教育でもあるので。高校に行くことに向けても、週１、１時間のペースで合ったとしても、ゼロよりはいい。

【フォローアップ】
フリースクールに通いながら、スタッフの付き添いのもと、中学校への登校にチャレンジした。１回の登校で、１０分～１５分程度の時間帯から開始。保護者の送迎の都合で予定通りに登校できなかった。計５回の登校後「学校はいやだ」と嫌がっているので、登校は難しいと母から連絡が入り、学校への登校は中止となった。
令和３年４月に適応指導教室に見学、体験を行った。適応指導教室では、体験１日目で、「あそこは無理」と本人から気持ちを伝えてきた為、適応指導教室の利用も中止となった。
利用期間は３月末で終了となったが、コーディネーター事業として、フリースクールに週２回、午前中のみの利用として、フリースクールへの登校を続けている。中学３年のこの一年間、どこにも繋がらないことで引きこもりになることを避けたかったので、移行先を検討し「e スポーツ」を中心に過ごしている放課後等デイサービスには興味を示したので、見学し利用について母への情報提供をしている。

② 対象者Ｂ（中３）

令和２年 1 月 14 日に病院の主治医を含めて２度目の支援会議（利用審査会）を実施。
※１度目の支援会議時点で、拒食状態だったため主治医からの意見も含めて再度利用のタイミングを検討した方が良いのではないかとの意見があり、２度目の支援会議となった。

出席者は以下のとおり。
　中原特別支援学校　巡回相談員　１名
　鳥栖市立鳥栖中学校　２名
　佐賀県発達障害者支援センター　結　１名
　特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）３名

【本人の生育歴】
　３才半検診で、数の概念がないこと、視野が狭いことなどにより発達の遅れを指摘され、すくすく子育て相談会で佐賀県の事業であるわくわくキッズを紹介され参加する。その後病院受診し、広汎性発達障害と診断されるが、母は診断を受け入れることにしばらく時間がかかった。療育についてなどの情報は丁寧に伝えられていたが、療育を開始したのは、その２年後の平成２６年４月からとなった。療育先は変わったが、その後も療育には続けて通っていた。

【フリースクール利用開始前の状況】
　中２の４月は登校ができていたが、５月の１０連休以降、調子が悪くなっていった。学校には週２，３日登校し、遅刻・早退を繰り返すようになった。その後夏休み明けには、昼夜逆転し学校への登校ができなくなった。９月頃には、拒食状態になり病院で点滴を受けるような状態となっていた。２回目の支援会議時点（１月）には、少しずつ食べられるように回復はしているが、昼夜逆転の状態は続いていた。相談機関（２か所）には、学校へ登校しなくなってからも、通うことはできている。

〇本人の特性（苦手なこと）
・一日の生活の流れに見通しを持こと
・やるべきことを自分で判断して行動すること
・スケジュールなどの視覚的支援の提示の仕方によっては、バカにされていると感じる
　また、特別支援学級に通っている生徒のことを、本人自身のことも含めて「私たちは、ガイジだから。」と家で話すことがあり、自分たちは異常だという思い込みで、ネガティブなイメージがある。学校に通うことができていた頃は、特別支援学級の生徒や先生と一緒に、トランプや人生ゲームなどを楽しんでいた。フリースクールＳＡＧＡの見学後、本人は「悪くない」という。
　拒食に関して、主治医は食に対しての興味があまりなく「食べられない」のではなく、やっている事をやめてまで食べることが「めんどくさい」のではないかと説明があった。

本人だけでなく、母も気分の不安定さがあり、相談機関から言われた内容と他の関係機関が違う言い方で伝えると不安定になる。フリースクールＳＡＧＡの利用に関しては、全員一致で承認。小学生のころから相談機関へも通っており、自己認知の学習などは済んでいた。フリースクールは規則正しい生活を組み立てることを目的とした。利用開始より、体力がないことや、本人が無理なく継続して通うことができるようにとの保護者の希望から、週２日間、午後から時間帯での登校を設定したが、設定された日は登校できた。梅雨時期は、体調不良でフリースクールを休むこともあった。時期が苦手で、梅雨時期は体調を崩しやすいので、家庭や、フリースクールで体調不良になった際の適切な伝え方（セリフ）についても、視覚的な手立てを用いて練習した。

令和２年７月２０日に鳥栖市立鳥栖中学校で支援会議（利用半年の経過報告）を実施。支援会議後に、保護者退席の後、半年間の利用延長の審査会を開催した。

出席者は以下のとおり。

保護者１名
中原特別支援学校　巡回相談員１名
鳥栖市立鳥栖中学校　４名
佐賀県発達障害者支援センター　結　２名
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）３名

【支援会議内容】

〇保護者

フリースクールを利用して心がほぐれてきた。本来の娘の状態に戻ってきているようだ。本人は「今鳥栖中に戻る気はない。フリースクールで過ごしたい。」地域の中学校がすべてではないと思っている。フリースクールに通うことが自信になっているのは良い。今後も半年間の利用継続を希望する。

〇支援学級担任

転入学相談会（特別支援学校）の時に久しぶりに対象者Ｂと会い、フリースクールで頑張っている様子で安心した。

以上の意見、その他複数の意見を踏まえ半年間の利用継続が決定した。

中学３年の夏休みには、母と本人で通信制高校をいくつか見学。本人は、高校には行っておいた方が良いと考えている。中学３年の冬、高校進学の為の作文は相談機関で相談し作成。面接の練習をフリースクールで行う。

令和２年２月に利用経過終了の支援会議を予定していたが、コロナウイルス感染症予防対策の為、学校と相談し、会議を中止することとなった。
下記の参加予定者に、保護者の了承を得て支援会議の資料のみを送付している。

鳥栖中学校
中原特別支援学校　巡回相談員
佐賀県東部発達障害者支援センター「結」
佐賀県健康福祉部障害福祉課
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）

保護者には、会議の内容について、個別面談の時間を取り、直接経過報告を行っている。
利用期間は、令和２年２月で終了となっていたが、本人の「３月まで登校を続けたい」との希望と、中学卒業まで残り１か月間という短い期間だったため、佐賀県障害福祉課の許可のもと、残り１か月間はフォローアップ期間としてフリースクールへの登校を継続した。現在は、通信制高校に進学している。
フリースクール卒業後、保護者からの希望で進学先の入学相談員の先生とフリースクールＳＡＧＡのスタッフで、情報共有を行った。

③ 対象者Ｃ

令和２年２月１７日に利用審査会を実施。出席者は以下のとおり。
武雄市教育委員会
武雄市発達障害児支援室
御船が丘小学校
嬉野特別支援学校　巡回相談員
佐賀県東部発達障害者支援センター「結」
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）

【本人の生育歴】
３歳時に肥前精神医療センターで受診し、自閉スペクトラム症、注意欠如多動性障害の診断を受けた。診断書には、「社会状況把握の困難さ、援助要請や自らのニーズを伝えることの困難さ、常同性が目立ち変更やいつもと異なる状況で混乱しやすい。その特性に併せて過敏・過覚醒の傾向があり、多動・注意転導性の高さ、衝動性の高さ、刺激への反応抑制の困難さが認める。他児との関わり、

トラブルの状況の理解や自分が取った行動との因果関係の理解が困難であることや理解をしていても衝動性のために自分の行動のコントロールができず粗暴行為となることも多い。混乱や粗暴行為が頻回であることもあり、状況理解が不十分なまま大人から注意を受けることも多く、自己評価の低下につながっている。これらのことから、刺激量（視覚や聴覚的刺激など）を減らす環境調整と、見通しをはっきりと視覚的に伝え、混乱時にはクールダウンし、落ち着いた後に状況理解を促すなどの個別の対応をしていくことが、本児が自身の能力を適切に伸ばしていくために望まれる」と記されている。

〇生育・受診・相談歴

１歳半の頃、視線が合いにくい、「〇〇持って来て」が伝わらない、名前を呼んでも振り向かない、人より物に興味がある等の行動が見られていたことで、相談する。

2011 年 7 月～11 月に佐賀県の事業「わくわくキッズ」を利用

2011 年 11 月発達障害者支援センター　結でＰＥＰⅢ検査を実施

2012 年 2 月から療育支援の利用開始

2012 年　　肥前精神医療センターで広汎性発達障害

※現在は自閉スペクトラム症、ＡＤＨＤ。

2015 年　心と発達の相談支援機関の利用開始

2015 年 4 月　武雄市立御船が丘小学校（特別支援クラス）入学

2019 年 4 月　５年生になり、中学進学を視野に入れ、学校でも交流クラスの生徒と同じ事ができるように求められることが増えて不安定になることが続き休むこともあった。

2020 年 1 月 24 日　先生がやるべき事（情報の伝達や帰りの会）をクラスメートがやっていることの意味がわからず、不安を口にしたところ左隣の女の子から笑われた事でイライラし、女子児童の首を鉛筆で３か所刺してしまう。母が学校に呼び出され説明を受けるが、本人は自分のやったとことの意味を理解できていなかった。相手家庭へお詫びに行くと、相手女子児童の保護者から「安全であるべき学校でこのような怪我を負わされた」と不満を聞いたこと、相手女子児童の記憶に残ることを考え、２度と学校へ行かせることはできないと両親で話し合った。本人は悪いことをした認識はあるが同級生を傷つけたことへの反省がどこまでかは不明。また、「自分いじめられ、ひどいことを言われたときには誰も謝ってくれないし、その保護者もうちに謝りに来ないのに、なんで自分や自分の両親だけが、こんなに責められるのか。不公平だ」と言っていた。保護者はこの件に関して、きちんとした学習をし、反省させなければと考えていた。父は学校に経緯について書面で報告をして欲しいと伝えるが、本人が振り向きざまに

持っていた鉛筆が女の子に当たった事故であり、本人には責任もなく、学校としては何も問題ないので登校するようにと口頭で説明され、不信感が強くなっていき、フリースクールの利用を希望された。

【利用審査会】
〇学校
　同級生とトラブルを起こし、保護者判断で自宅待機しており、保護者（特に母親）が心配している。今後、学校でどう過ごすか検討中である。今は、担任が自宅に手紙などを届けている。学校登校時は、母が後ろからついて登校している。下校は、母が車でお迎えにきて、その際にその日の様子等を報告している。両親ともに、とても熱心に取り組まれており、保護者の要望により毎年本人の支援会議を行っているが、先生方から「ひどい言葉がでる」と言う意見あった。
　1 月 24 日の参観日（女子児童を刺したこと）については、いつもは担任がする「明日の連絡」をクラスの子が書いていた。本人は、「なぜ、君がする？」と言って、それを消そうとした。その様子を周りの先生が気付いて、本人へ「落ち着いて席に着こうか」と声かけをしている。席に着き、左隣の女子児童が笑っていた。本人は、その児童が「自分を笑った」と思い、直接「何で笑う？」と言い鉛筆を持った左手で肩を叩いた。左肩に三か所の傷が出来ていた。

〇巡回相談支援員
　本人は自閉症の症状が強く、保護者の望む支援を学校で整えることは難しかった。学校には不登校なわけではないが、利用して学習の機会になればと思う

〇佐賀県東部発達障害者支援センター　結
　アナザープラネットやそれいゆ伊万里などの支援機関を利用しているが、その上でこのような事が起こったので、学校での支援には限界がある。自宅からフリースクールまで遠いが、通えるなら利用できるし完全な不登校になるよりも、予防的に利用も可能。

〇学校
　本人が学校へ行きたくないわけではない。保護者と一緒に本人が謝罪へ来た時は「なんで俺だけ謝らないといけないのだ」と（納得していないようで）泣いていた。学校からも保護者へ説明したが、すでに保護者が教育委員会へ相談していたので、学校で具体的に今後の対策案を考えようとしていたところだった。他の友達と関わろうとするが、言葉が攻撃的で特定の児童にしつこく言ってしまう。気になる児童がいると、その児童の近くまで行って一言、二言いってしま

うこともある。先生にも攻撃的な言葉を使っており、イヤーマフを付けていると安心するようで、落ち着くようだった。学校の活動では、朝の活動やはなまるタイムは大好きで、積極的に参加していた。今回の事を正しく学んで今後の人生に正しく生かしていって欲しい。本人の気持ちを大切にしながら、フリースクールのサポートを受け中学校へ向けてよりよい１年になったらいいなと思っている。

〇武雄市教育委員会
　直接関わったことはないが、本人に姉がいるため対象者Ｃについては知っていた。以前は、特別支援学校へ転校できないことがわかると、保護者が泣きながら苦情を言われることもあった。利用については賛成である。

〇それいゆ
　母の不安も強く、本人から離れることができなかった。フリースクールを利用することで、ご家族の不安解消になるのではないか。少し自立に向けてフェードアウトも必要ではないかと話し合っていたところであった。

以上の意見、その他複数の意見を踏まえて、フリースクール SAGA を利用することが決定した。

令和２年 9 月 17 日に御船が丘小学校で支援会議（延長利用）を実施。
出席者は以下のとおり。
　両親
　嬉野特別支援学校　巡回相談員２名
　武雄市立御船が丘小学校　３名
　佐賀県発達障害者支援センター　結　２名
　佐賀県健康福祉部健康福祉課　１名
　特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）３名

対象者 C について、出た意見は以下のとおりである。

〇フリースクールでの様子
　週５日、１０時～１５時で登校している。病院受診がある日は、半日登校することもあった。スケジュールに沿って、自立的に活動へ取り組むことができている。約束表を導入し、決められたルール（時間を守ること・片付け・言葉遣いなど）を守るように練習した。守れた場合はフリースクールでのゲーム時間が＋１分増える設定だった。最初はなかなかうまくいかず暴言を言ってしまうことが

多かったが、徐々に意識して活動に取り組むことができていた。特性上、変更などが苦手である。そのため、スケジュールの変更（特に好きな活動がなくなる、変わる）場合は、時には大きな声を出し壁やドアを蹴ったり叩いたり、物に当たることもあった。その都度、本人へ聞き取りをし、自分がどんな気持ちだったか・イライラしたらどうしたらいいか・他人の物に八つ当たりしたら責任（弁償）をとらないといけないことなど確認する事を積み重ねている。

〇保護者

安心してフリースクールへ登校することができている。そのため、安定して自宅でも過ごすことができている。できることが増えて、嬉しく思う。しかし、まだまだな部分があるのも、家庭で様子を見ていて思う。今後も療育を含めた生活を考えていけたらと思う。ぜひ、フリースクールを継続したいと思っている。中学の進学先を検討している。

〇巡回相談支援員

もう少し本人の力を伸ばしてから、次の学校につなげた方が良い。転入学相談をうけたからといって、必ず転校できるわけではない。後は、武雄市の判断になる。中原特別支援学校への転校については、１１月中には判定がおりると思われる。

〇佐賀県東部発達障害者支援センター　結

特性シートをみて、学校の生活は勘違いの連続で、大変だっただろう。

〇学校

学校の中でも、目の行き届かないところもあったと思う。保護者の希望もあり、本人も学びになるのなら。

令和３年３月に利用終了の支援会議を予定していたが、コロナウイルス感染症予防対策の為、学校と相談し会議を中止した。

④ 対象者Ｄ

令和２年５月２６日に利用審査会を実施。出席者は以下のとおり。

小城市教育委員会

桜岡小学校

大和特別支援学校　巡回相談員
佐賀県東部発達障害者支援センター「結」
佐賀県健康福祉部障害福祉課
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）

〇対象者Ｃの経緯
　９歳時にクリニックを受診し自閉スペクトラム症、ADHD（自閉スペクトラム症に起因する）と診断される。
※現在は肥前精神医療センターに、月１回を受診している。

〇診断書
　自閉スペクトラム症、正常ないし正常下限の知的能力、不注意症状（純粋なADHDによるものではなく、自閉スペクトラム症に起因する）、認知能力アンバランス。特別な教育的ニーズを有しており、小学校等では個別の支援（情緒特別支援学級、通級指導など）を要する。他にも、喘息や両目弱視、両足外反足のため、病院受診（月１回）・眼科（３か月に１回）、大学医学部附属病院（半年に１回）に受診をしている。

【利用までの経緯】
　対象者Ｃのいとこが、Ｃが気にするような事をしつこく言ったり嘘をついたりしていつも大喧嘩していた。
※対象者Ｃとそのいとこは、祖父母宅で面倒を見てもらうことが多かったため、ほぼ毎日顔を合わせる関係。夕方になると、本人が自傷行為（自分を噛む、壁に当たる）をしたり母に手を上げたりして手に負えなくなっていた。放課後等デイサービスを利用しようと思ったが、まだ診断がなかったためその判断をしてくれる病院を探していた。知り合いのつてを頼り、児童相談所でWISC検査をしてもらい、結果を持ってクリニックに行ったところ、自閉スペクトラム症と診断される。
幼稚園等では発達障害はないだろうと言われていた。
小学２年生（10月頃）に学校へ行きたくないという日が増える。
小学３年生（9月頃）に、親戚の通夜へ参列。そのため、宿題ができず、休み明け「怒られる」と泣き叫び動かず、学校登校へ時間がかかる。この日から、登校を渋るようになる。
３学期になり、学校へ行き渋りがあり、学童へも暴れて行きたがらなくなる。当時の担任の薦めもあって、市の子ども支援センターへ相談した。4 年生になり、

適応指導教室と学校を交互に登校する。しだいに学校へ行かなくなる。
本人が「運動会へ出たい」と言いだす。そのため、運動会の練習へ参加しようとするが、他の児童が練習しているのを見て、できない自分が嫌になり「参加したいけど入れない。怖かった」と話し、パニックを起こす。パニックになった際は、泣き叫び走って逃げたため、先生に追いかけられたことで、ベランダから飛び降りようとする。運動会は参加できず、「いけなかった。参加できなかった。」と本人の中でネガティブな経験として残り引きずっていた。その後、登校できていない。

小学５年生になって、情緒クラスへ在籍
適応指導教室にも通うが、そこに通う中学生から体型を茶かされ「怖い」と言って通えなくなる。その頃から、夜泣きが始まり夜響症になる。
エビリファイを寝る前に半錠服用するようになって落ち着く。
宿泊学習へ参加したが、バスでの出発にパニックを起こす。一旦帰宅後、母と日帰りで行く。
肥前精神医療センターへ検査結果を聞きに行った際、大パニックを起こす。しかし、その後も受診へいくことはできている。
「今年こそは」と運動会へ参加している。練習にも参加し、運動会へ１日参加することができた
３学期は登校できていない。３月は他の利用者が来ない時間に放課後等デイサービスを利用していたが新型コロナウイルスで学校が休校で日中の時間帯に他の児童生徒が通う状況になり、行く事ができなくなり家で過ごしている。

【審査会】
〇学校
　フリースクールの利用について、学校から反対する理由はない。今の状況から考えて、これを逃すことはない。パソコンの授業がある日はその時間に登校しクラスのみんなと授業を受けることができている。書くこと、運動が苦手で自分に自信がなく、ネガティブな思考になる。学校で暴れることはないが、甘えている（幼い）感じがあり、嫌な時、こまった時は、固まってしまう。

〇教育委員会
　令和元年９月～令和２年２月は適応指導教室に１５日間程登校しており、段ボールで工作などをして過ごしている。特性のある中学生、口調の強い生徒もいる。保護者はなんとかどこかに繋がりたいと思っているのかもしれない

〇大和特別支援学校　巡回相談
　就学相談に参加している。病弱特別支援学校を一番に検討されており、転校した場合は転居も考えている。就学相談では、盲学校も案として提案され、バス通学の検討もされているようだった。
以上の意見、その他複数の意見を踏まえて、フリースクール SAGA を利用することが決定した。
　令和２年 12 月 7 日に桜岡小学校で支援会議（利用終了）を実施。
出席者は以下のとおり。
　保護者
　大和特別支援学校　巡回相談員
　小城市立桜岡小学校
　小城中学校
　佐賀県発達障害者支援センター　結
　佐賀県健康福祉部健康福祉課
　特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）

対象者 C について、出た意見は以下のとおりである。

フリースクールでの様子
　令和２年６月から放課後登校することから利用を開始している。緊張からか、スタッフからの声かけ等には頷くまたは首を振ることで返事をしていた。スケジュールは、最初は A4 のリスト方式だったが、内容は理解していても緊張等で提示している場所に移動することができないため、形を変えカード形式へ変更した。自立して活動することができず、指示待ちの状態だった。物の貸し借りで、スタッフへ「貸してください」「ありがとうございました」のコミュニケーションが取れなかったが、スタッフが促し、褒めることで徐々にできるようになってきた。
　その後、日中の時間に繰り上げたが他のメンバーと同じ空間で過ごすことには不安そうだった。
フリースクールの利用を開始するまでは、母が仕事に行った後、一人で PC・ゲーム・タブレットで自由に過ごしていたが、そこからの切り替えが難しかったため、母が仕事に行った後、祖父母が送迎にきても、なかなか登校できなかった。特にオンラインのゲームの大会の日には登校への抵抗が強く、同級生が学校に行っているので、「みんな不登校になれば海外の人との大会に参加できるのに」と言うこともあった。フリースクールでルールやマナーを学ぶことが窮屈で、我慢することに対する抵抗が強かったので、支援をしようとするとフリースクー

ルへ登校する事を渋るようになった。
　モチベーションを高めるために料理課題を設定したりしたが、なかなか継続的な利用には至らず、自宅でゲームを中断する事への抵抗が強くなり、フリースクールの教室内へ入らず、廊下で過して下校することもあった。仕事をしている母は、本人に向き合う事が難しく、言いなりになった方が楽だからと言われるようになった。

〇保護者
　本人が３学期から学校へ行くと言っているので、延長利用は希望しない。本人も令和２年 12 月の利用で終わりと思っている。フォローアップはお願いしたいと思っている。フリースクールへ行かない理由は、よくわからない。

〇小学校
　登校した際は、支援級でほぼ過ごすことになると思う。６年生の始めは、他の生徒から誘われることで流れに乗ることができていた。５年生までできなかった、給食を食べることができるようになった。今まで、他の子たちに入って、紛れて、流れに乗って、結果疲れて休みになる流れだったかもしれない。

〇中学校
体操服で登校する子もいる。中学校へ行って校則や学校の事を確認することはできる。学校の登校時間は調整することができる

以上の意見、その他複数の意見を踏まえて、フリースクール SAGA の利用終了することが決定した。会議後半年は、フォローアップ期間として学校へサポートすることとなった。

１月６日にスリースクールスタッフが情報共有のため学校へ訪問。
支援方法等について、支援クラス担任と話し合っている。
５月２３日に小城中　支援クラス担任より連絡があった。中学校へ週２～３日登校している。入学式後、意欲的に登校していたが部活動見学で美術部へ見学に行くとあまりにも人が多く驚いていた。その後、学校を休むことが増えてきたとのこと。今後の登校について保護者へ相談した際、「フリースクール卒業後、半年はフォローアップ期間なので、フリースクールに聞いてください」と言われ連絡したと言われていた。また、次の週に体育祭を予定している。新型コロナウイルスのため、三年生の保護者のみ観覧可になっている。本人の保護者が一緒に登校できないことがわかると「ママがいないなら行かない」と言っているらしく、

どうしたらいいでしょうかとのことだった。
　フリースクールからは、体育祭は初めての経験の為イメージわかないと思われること、短い時間体育祭に参加し教室で待機して下校などをしてみてはどうかと提案している。小学校の運動会ではフリースクールスタッフが総練習に同行して、本人・保護者・担任・スタッフで競技の場所等を確認したことも伝えている。その週はまだ一度も登校しておらず、「今日まで休んで木・金頑張る」と言って休んでいる。

⑤ 対象者Ｅ（小３）
令和２年７月に鹿島市立古枝小学校で支援会議（利用審査会）を実施。

出席者
鹿島市教育委員会　２名
うれしの特別支援学校　巡回相談員１名
鹿島市立古枝小学校　４名
佐賀県発達障害者支援センター　結　１名
佐賀県障害福祉課　１名
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）３名

【経緯】
７歳の時に、自閉スペクトラム症の診断。
ＷＩＳＣ―Ⅳ　全検査ＩＱ：９１（７歳時）言語理解７８、知覚統合１０９、ワーキングメモリー１００、処理速度８０

幼児期は泣くことが少なくニコニコした機嫌のよい子で、怖がりだったが、泣くことはなかったので保護者は個性だと思っていた。記憶力が良い、難しい言葉を使う、過集中などが見られていた。
小学校に入学し、問題行動が家庭でみられるようになってきたことと、母の友人の子どもが、自閉症の診断を受けた事を聞き、「それなら、うちもそうだろう。」と思った。
小学１年生の６月、授業参観の様子は、授業に集中ができておらず机の周りには、本児の道具や眼鏡が落ちていた。机の上には、授業に必要のない科目（朝からの授業に使った教科書）がそのまま机の上に乗っている状況で、授業の内容も聞くことができていなかった。不登校が続いていたが、本人が学校の臭いや、響きが

気になる（セミオープンの為）ことがあり、３年生の時に弟の入学に合わせて校区外の学校に転校をした。
家庭では、ニコニコしながらパンチをしてくることがあったので、注意をすると、キックボードで家を飛び出し、迷子になった。
「いやだ」という気持ちをうまく伝えることが出来ず療育機関でも駐車場に着いてから道も分からない場所で逃走した。療育機関では、逃げ出すのではなく、車の中にいる事ができたらご褒美をもらえる設定での療育に取り組まれ、徐々に療育機関に通うことができるようになった。
転校してから、弟（特別支援学級在籍）が小学校に入学し、楽しそうに通う様子を見て、「いつになったら行けるの？」と本人も行ってみたい気持ちになり、転入後の５月に見学に行った。いざ見学に行ってみると、「分からないことが多くて不安。行きたくない。（先生の話は）早口で聞き取れない。」と結局登校できなかった。

【利用審査会】
〇学校
特別支援学級は、人数も多く特性の強い子どもも多い。小学校では個別対応ができないので、難しいかもしれない。少人数の中でどのような支援をした方が良いかはわからない。専門性のあるところで学びをしてステップを踏んだ方が良い。
保護者の要望には１００％答えるつもりでいる。学校としても、フリースクールを利用することで、スキルアップにもつながる。学校も勉強の機会になる。
フリースクールに行くことで、これまで積み上げた学校との関わりが切れてしまわないかと気になる。本人の負担にならない程度に、学校との関係を続けられたら。

〇巡回相談支援
不登校が長引きすぎる前に利用をした方がいい。
療育機関では、１：１の個別対応の中で学びが出来ているので、次のステップとして、フリースクールの少人数の中で学んでみてもいいのではないか。いきなり学校に行って、失敗したとしても、本人が傷つく。

以上の意見から、全員一致でフリースクールの利用が決定した。

夏休み期間中の他の生徒がいないところから利用を開始。
移動時にクルクル回るなど、行動は年齢よりも幼い。フリースクール利用前から、療育機関や家庭で視覚的な手立てを使っての支援を受けてきていた為、フリー

スクールでも抵抗なく、スムーズに支援を受け入れた。

　フリースクールに慣れてくると、スケジュールを自分で張り替えたり、昼食前の手洗いのスケジュールの時に、手を洗いに行ったふりをしてみたり、些細なことではあるけれど、小さな嘘やごまかしが目立つようになった。学習中に分からない事があっても、分からないことを認められず、スタッフからの助言やアドバイスを聞き入れることができなかった。また、自分の気持ちを伝えることが苦手で、伝えるセリフやタイミングが分かっている状態であっても伝えられず、わざわざ言葉にして言わなくても分かるだろうというような様子が目立ってきた。
移動先に他の生徒がいると、移動ができず自分の個別のエリアで様子を伺うような行動もみられた。スタッフからみて、不安なのだろうと思い、本人に尋ねても「何が？そんなことない！」と不安であることを隠し、会話から逃げてしまうような状態だった。
　令和２年２月に利用経過半年の支援会議（経過報告）を予定していたが、コロナウイルス感染症予防対策の為、学校と相談し、会議を中止することとなった。

　保護者には、個別に面談の時間を設定し、半年間のフリースクールでの様子、支援状況について報告を行っている。その際に、診断後から通っていた療育機関にも同席してもらい、少人数での報告会（情報共有）を行った。

報告の内容
笑顔も多くみられ、決められた予定に沿って継続して通うことが出来ている。
常に緊張しているわけではないが、利用後半年が経過しても、コミュニケーションの場面の強い緊張や、他の生徒と関わる（すれ違う）ことに対しての不安、間違えることなどへの不安がやわらぐ気配がなく、学ぶ体制がなかなか整わない。
不安の強さも関係しているのもしれないが、支援（助言を含む）を拒否してしまう部分がある。
会議の中で、現在の状況や、幼少期からこれまでの経験の中で誤学習をしている事や、家庭での関わり方についてなどを話し合った。
また、次回の病院受診の際に、人と関わる場面の不安の強さが半年利用した状況においても、やわらがないことについての主治医の意見を聞くことになった。

病院受診で「緊張性不安症」の診断がおり、服薬が増えた。服薬の調整が始まったため、主治医の指導のもと、しばらくは負荷を与えず（支援内容は変えず）に様子を見ることになった。

⑥ 対象者Ｆ（小３）

令和２年３月に、みやき町立北茂安小学校で支援会議（利用審査会）を実施。

参加者
中原特別支援学校　巡回相談員１名
みやき町立北茂安小学校　２名
特定非営利活動法人それいゆ（委託先法人）３名

【利用までの経緯・生育歴】

７歳の時に自閉スペクトラム症の診断。その後８歳の時に、「心身症」の診断も新たに増えている。幼児期は、やんちゃな子といった印象。完璧主義な部分もあった。参観日や発表会などでは、表情が引き締まり姿勢も一度も崩さないような子どもだった。小学１年の時には、文字を書くときに枠からはみ出すと怒る。人に怒られている意味が理解できず、怒られると隅っこでじっとしている。
１年の２学期から歩いて登校することを嫌がり、朝は車で送る。
１年の３学期に、疲れを訴え急に動けなくなり、食事が取れなくなった。病院受診し肝機能の低下と診断されたが、その後もずるずると休むことが増え、無理に登校を促すとパニックになった。
小学２年になると、毎朝登校を渋るようになり、宿題を嫌がり暴れ暴言暴力が増え学校には行けなくなった。
１１月から、町の適応指導教室に行くようになったが、２月に適応指導教室で他の生徒とトラブルになり、行けなくなる。
家庭でも学習にはほとんど取り組むことが出来ていない為ひらがな、カタカナ、漢字、九九などできていない。
小学３年の３月から北茂安小内にある、「学びの教室」（通級指導教室）に週３日（４時間）通い始めた。決められた予定は、休まずに通い、週３日間のうち１日は、毎週校長室で、交流級の数人の生徒と一緒に給食を食べる時間が設定されており、本人もその時間を毎週楽しみに通うことができた。
「学びの教室」では、個別の支援を受けたことで、困っていることを癇癪や暴力ではなく、相談できるようになっていき、家で１日中やっていたゲームの時間が１日５時間くらいにまでは減った。
日に日に落ち着いた生活ができるようになっていき、家族への言葉遣いや関りが、穏やかに変化していき町の適応指導教室にも、再び通うことができるようになった。

〇学校

今後も、集団の中に戻ることは難しそうな印象。本人は、帰りの会が終わって、みんなが一斉に帰るのがすごく嫌、無理だと話す。
何度かチャレンジしてはみたが、教室の後ろの方から、入室するのも無理だった。
フリースクールＳＡＧＡの利用が終了したら、病弱クラス（新しく作る）か、情緒クラスになると思われる。
病弱クラスになると、１：１の個別対応が出来る。
現在、本人が「学びの教室」「適応指導教室」と通う場所があり、今後フリースクールＳＡＧＡに行き始めて、本人の気分で、行き先を転々とする状況になってしまうようであれば学べないと思う。
フリースクールまでの通学手段については、学校側からも、安全面が心配な為、保護者の責任で送迎するように再度保護者と話をしておく必要がある。

以上の意見、その他複数の意見を踏まえ、フリースクールＳＡＧＡを利用することが決定した。

利用開始後は決められた登校予定に沿って継続的に登校できている。
徐々に登校日数、時間を増やし、週５日間１０：００～１５：００の時間帯で登校することができている。今後は、スタッフとの関係ができてきた頃に、自己認知学習を始めて行く予定。

５　分析、考察

令和２年度は６名の発達障害児を支援し、１名は小学校卒業のタイミングで、病弱特別支援学校中学部に入学している。その後は毎日登校し、現在も相談機関で自己認知などの学習を続けている。

１名は、中学校卒業のタイミングであった為、通信制の高校を受験し、進学している。

１名は、利用期間終了後にフォローアップ期間を利用して学校、適応指導教室にとチャレンジをしたがどれも本人が継続して通うことができなかった。考えられる理由としては、本人の記憶の特性上、「学校」自体がネガティブな場所であったことが考えられる。「俺の事を知っている人には会いたくない。」と話していたからである。また、適応指導教室に関しては、本人に必要な支援を新たな場所に移行することの難しさがあった。事前に適応指導教室の職員と話し合いを行い、情報の引継ぎや支援方法など具体的に確認はしていたが、本人の登校意欲とのバランスが難しかった。現在コーディネーター事業でフリースクールへ週２回の登校を続けながら、放課後等デイサービスを見学体験し、本人が安心して通うことのできる場所を検討中である。

他２名は、現在フリースクールに登校しながら支援継続中である。

１名は、利用半年で在籍校へ戻り、中学校へ進学している。その利用者については、フリースクールへの利用半年の期間も、継続して登校することが出来なかった。理由としては、本人が家でゲームをしていることを好み、保護者もその行動をやめさせてフリースクールに連れてくることが難しかった。また保護者は、フリースクールの登下校時間帯に仕事をしており、代理で祖父母が送迎を行っていたので、時間をかけてでも待つ支援を行う選択もあったが、祖父母への負担も考えると支援者側も踏み込むことができなかった。保護者自身が日々の生活が精一杯な状況であり、先を見通して今やるべきことを選択していくことが難しかった為、本人に負荷をかけるような自己コントロールの訓練や学習を行うことについて望まれず支援者側も支援を深めることができなかったので保護者が自閉症について理解を深める機会も十分に取れなかった。

この結果から発達障害児が周囲の環境に適用するには、自身の障害の特性を認知して、障害となっている点についてうまく対応できる能力を対象者が身につけることと、保護者、学校、支援者が連携して、対象者が相談できる体制を整備していくことが重要である。

対象者が自己認知するにはある程度の時間が必要である。在籍校からの卒業が迫っている中学３年生などは、十分な支援期間を確保することができず、自己認知が不十分となり、上手く周囲の環境に対応することが難しくなる。また高校に進学して周囲の環境が大きく変わることにより、周囲の相談体制が不十分になってしまうことも復帰が難しくなる要因となる。支援については早い段階で実施することが重要であるが、早い段階で支援を受けることができなかった対象者に対しても、新しい環境で上手く適応できる環境整備をしていけるような体制づくりをしていくことが重要である。

6　企画・推進委員会の実施状況

佐賀県発達障害者支援開発事業企画・推進委員会を開催する予定であったが、コロナウイルス感染拡大により、書面開催となった。

フリースクールとはいえ、二次障害で不登校となっている児童生徒に必要なのは福祉的側面からの支援である。関係する専門機関と情報の共有をして、教育的側面だけでなく福祉サイドも入れた両面からの支援を、学校の現場に伝えていく必要がある。

7　成果の公表実績・計画

佐賀県ホームページで取り組み結果を公表する予定である。